

敦賀と琵琶湖北岸との距離は、わずか20kmほどです。さらに琵琶湖を船で行き南岸に至れば、山一つ隔てた京都は、まさに目と鼻の先です。若狭(日本海)が思いのほか近いことは、例えば、平安朝の桓武天皇が、東北平定に当たり、軍需物資を日本海経由で運んだことでも知られます。また、若狭は朝鮮半島や中国大陸にも近く、人と文物の交流路でした。反面、防衛上は海からの脅威が増すことにもなります。若狭・日本海中心に地図を見れば、およそ世界観は変わりますよ。尚、厳密に言うと敦賀は越前に属しますが、広く若狭地域と考えて構わないでしょう。

敦賀～塩津間・運河計画をめぐる波紋 —— 井伊直弼(彦根藩)と酒井忠義(小浜藩) ——

井伊直弼は、安政大獄を断行した専横的な人物と評されますが、武家の茶の湯であった石州流(片桐石州が祖)の茶人としても有名で、かなり優れた文化人でもあります。

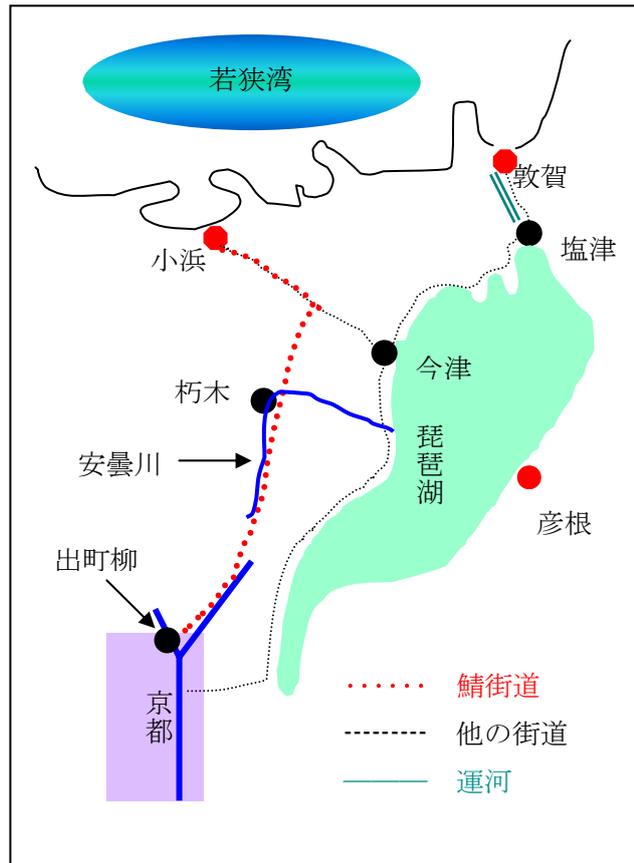
彼が江戸詰めの際は茶席を持つ日も多く、小浜藩の酒井忠義は何度も招かれています。しかし、安政2(1855)年12月11日を最後に、忠義が招かれることは無くなりました。その原因は、敦賀藩を支藩に持つ忠義(小浜藩)が進めていた運河計画(敦賀～塩津)が発覚し、これに直弼が異議を唱えたためでした。

敦賀と琵琶湖とを結ぶことは、若狭と畿内(特に京都)とを近づけることになり、敦賀藩及び小浜藩は政治的にも経済的にも重要度がぐんと増します。当然のこと北陸や奥羽諸藩にとっても、利用価値は大きくなります。

一方、陸路(北国街道・中仙道)の結節する要衝であった彦根藩からすれば、存立基盤を根底から危うくする重大問題となるのです。

しかも、京都防衛役を自負してきた直弼のプライドを傷つけるものでもあったわけです。しかし結果は直弼の敗北でした。後に西回り航路(山陰～瀬戸内海～大坂)が発達し、運河自体の利用度はそれほどではなかったものの、小浜・敦賀両藩の賑いに比べ、彦根藩の凋落は明らかでした。

尚、当事件は後の将軍後嗣問題(家茂 VS 慶喜)や無断条約調印問題、さらには安政大獄への序曲となったという説もあるほどで、江戸末期を象徴する、見逃せない事件です。



京都の鯖 

京都では、郷土料理として鯖さばずしが好んで食べられます。以前ほどではありませんが、今でも葵祭りをはじめ祭礼儀式的場に供されることが多く、また贈答用としても人気を保っています。宮中を抱えていただけに京都の味は絶品ですが、大阪の「ぼってら」も極上、甲乙付け難いですね。

さて、海から遠い京都で鯖が定番となる理由は、若狭から鯖が豊富に運ばれて来たからです。鯖は食材という範疇を越えて、若狭・近江・京都を一つの文化圏にした存在でもありました。

御食国・若狭 奈良に都があった時代のこと、若狭国は「**御食国**」と位置付けられていました。朝廷に食材(生鮮品)を貢納する国、という意味です。献上品は穀物や肉でもよいのですが、海に面していない都では、海産物は重宝されたでしょうね。アワビ・鯛・貝類、ウニ、塩などが主要品目です。鯛鮓の名が早くも登場し、おそらくは「なれ鮓」、かの有名なフナ鮓同様のものと思われる。尚、御食国としては、他にも伊勢や瀬戸内地域、さらに出雲などがありました。

さて、若狭からの流通路は図示したもの以外にも数多くありましたが、「**……**」で示した道筋が古代からの幹線ルートです。朽木村をはじめ、花折峠、途中越えと山中を通り、大原の里へ出て、さらに高野川を下り賀茂川との合流地点へ。終着点は「大原口」、現在の今出川寺町辺りです。



鯖街道の往来

幹線路は一般に「若狭街道」と呼ばれていますが、近年、観光促進の意味合いからか「鯖街道」と命名され、かなり定着してきたようです。鯖に着目したネーミングは見事ですが、流通した品は鯖だけでなく、先述の鯛やアワビ、はるか蝦夷地からは昆布やニシンまでが運ばれています。朽木辺りは林業が盛んで、炭や木製茶碗・盆もあったようですし、大原の里からは当然漬物や薪などがあったことでしょう。ただ、魚介類が多かったことは確かで、中でも鯖は、防腐のために塩を振った上で運ばれるのですが、2日程度の行程がまことに好都合、熟れ頃となるわけです。

「ひと塩鯖」と呼ばれますが、理に叶った時間の活かし方、感心しますねえ。

さて、人の往来の方も忘れてはなりません。中でも朽木村は出色で、日本史上の有名な人物がたくさん登場しますよ。山間部という地理的条件ならではの人間ドラマが展開されています。

織田信長は、越前の朝倉義景を討つために京を出ますが、退路を近江の浅井長政に抑えられ、挟撃の危機に陥りました。この時、松永久秀の言に従って朽木村へ逃げ延びたのです。

しんがり殿軍の秀吉も、家康も置き去りにされています。信長は、日本を変えた歴史上の人物で筆頭に上るほどですから、鯖街道は、その後の日本の命運を左右した道だったわけですね。

寛元元年(1243)

道元が禅林を創始する

享禄元年(1528)

足利義晴が逃げ延びる

元亀元年(1570)

信長が辛くも逃げ延びる

朽木元綱は、この時に信長を助けた人物です。朽木氏の祖は近江国守佐々木氏で、承久の乱で宇治川先陣争いをした佐々木高綱なども一族です。朽木氏は足利將軍家との縁が深く、10代義植、11代義澄、12代義晴、13代義輝、15代義昭らは都を追われた際に朽木村に落ち延び、亡命政権の根拠地となります。尚、朽木氏の子孫は代々福知山藩主として明治に至っています。

道元は佐々木信綱の招きで訪れました。承久の乱で戦死した一族の供養のためです。この時、宇治の興聖寺付近の地形に似た場所を見つけて、寺の創建を信綱に勧めました。後年、近江初の禅林・岩瀬興聖寺の創始に至ります。それ以降、朽木氏代々の菩提寺となりました。

最後は興味深い話題。応永 15(1408)年6月22日、小浜港に南蛮船が着き、日本初の象が陸揚げされています。中国・明王朝支配下のスマトラ島から日本国王(=足利義満)宛への献上品でした。陸揚げ後は京都へと移動したはずですが、琵琶湖を利用して船で運んだという説が濃厚ながら、この鯖街道を行ったとする説もあります。象が歩く鯖街道、想像するだけで楽しいですね。

安曇川(あどがわ)は、鯖街道を代表する川です。源流地点は大原の百井峠、そのあと鯖街道に沿って北上し、朽木を經由してから東へ流路を変え、琵琶湖に注いでいます。全長 57 km。

奈良東大寺大仏殿の建築用材は、この流域の朽木の杣山から出した(勝宝3年・751)という記録があるようです。材木は筏で川を下るのですが、流域には筏師の守護神と呼ばれる「**思古淵神社**」が7社もあります。カッパ伝承と関係が深く、そうした伝承の多い東北や九州あたりでも同じものがあるようです。用材の他、平安時代からは**鮎・鱒・鯉**などの**漁獵**でも知られ、京都の両賀茂社へ献上しています。今日でも、**日本各地の河川で放流される若鮎の多くは安曇川産**なのです。

下流域では氾濫防止用に堤防を高く築き、護岸のため竹が植えられました。この竹を利用して江戸期以来「**扇骨**」が生産され、安曇川町西^{ゆるぎ}方木を中心に全国シェアは80%近くあるそうです。

花折峠 名称の由来は、数キロ離れた**息障明王院**への参籠の人々が、仏前に供えるシキミの枝を峠付近で切り取ったためと伝わります。因みに、**足利義満**や**日野富子**らの参籠札が明王院に残っているそうですが、少なくともこの二人は枝を折らなかったでしょうね。

二千院 大原では**寂光院**と並ぶ古刹。元は、大原の里に49もあった延暦寺の別院を統括する**政所**(^{まんどころ}事務所)でしたが、その**大原政所**を明治期に**三千院**と呼ぶようになったのです。来迎院の傍に音無しの滝があって、そこで二つの川(呂川・律川)に分かれています。この川の名は、「**魚山声明**」と呼ばれる独特の音声を付けた読経に由来していて、「**呂律**が回らない」という言葉を生むほどに難しい節回しを持っている、ということです。

平八茶屋 大原から南下して、八瀬を過ぎ、**赤山禅院**や**修学院離宮**近くに来ますと、老舗の**平八茶屋**があります。創業時期は古く、信長らと同じ天正年間(1573~92)とされますが、平安時代の古記録(延暦寺座主慈覚大師が休息された)も残ります。名物「**麦めしとろろ**」のほか、**若狭からの鯖が京で一番早く届く所**としても有名でした。市中に出回るのを待ち切れない食通は、荷が届くなり食することを楽しみにしたそうです。文人墨客の訪問も多く、また、文学作品にも名前が登場します。**夏目漱石**の『**虞美人草**』や**徳富蘆花**の『**思い出の記**』などがそうですね。

大原口 高野川と賀茂川の合流地点は**出町柳**と呼ばれ、「京の出外れ」という意味とので、昔は堤を強化する柳が植えられていたとのこと。橋を渡れば**御土居**の出入口(秀吉が築造、この口が柵形に造られていた)があり、それをくぐれば晴れて入京です。現在も、今出川寺町の交差点東北角に慶応4年(1868)建立の道標が立っていて、終着点を示しています。

こうして届いた鯖は、待ち受けていた仲買人の手に渡ったわけです。現在、出町柵形商店街の舗装路には、子供たちが描いた魚のレリーフがはめ込まれています。一方、出発点の若狭小浜の魚市場には「**京は遠ても(=遠くても)十八里**」と刻まれていて、そうした歴史を物語っています。尚、今回は陸路を辿りましたが、琵琶湖の舟運を利用して三条大橋から入るルートも利用され、重要な「鯖の道」であったことは言うまでもありません。ともかくも、若狭から鯖が届くことは、京都の人々にとって春の到来を告げる風物詩であったのです。